青山御流
活花手引種後篇　一
SECOND or ADVANCED SERIES

青山御家流

壽栄園水谷有雅大人著
錦章亭逸雅先生校

活花手引種後篇

京都 大谷津逮堂蔵

敘

荘周曰受命松柏獨也正在冬夏
青々此言也可取以賛我挿花矣
余遠祖黄門帝覚君深極挿花
之妙創青山様至今三百有餘歳
及門之徒日加月倍本支蕃懋惟

以我青山之流獨得其正也其説
曰挿花無他術要在多挿手熟之
則變化之則神韻自生或整齊
或疎放不敢拘一體然後見精
妙矣以多挿手熟為術之正也以
不拘一躰為法之正也苟知此

正訣則撓紅援紫偃作向背神韻
活動以全其天謂之活花而可以比
松柏冬夏青之矣苟不知之則戕
賊枝葉束縛支離拮据互至殘害
其天謂之殺花而殆如摟首無不
潰亂矣殺活之竅特在其得正似

松柏與否耳若夫不知訣不由法
而亂插漫投則雖不戕賊豈復得
全其天哉是亦殺花之甚也
故余門謂插花曰活華余嘗悶殺
花之徒令會頭壽栄園老人作活
華手引種續篇以誘後進老人以

遊心得手之餘祖述希覺君之
說可謂得其正訣矣今而後之進
得知活華之正法實頼此編豈
惟免於殺花耶余知此編之
永行於世也與松柏冬夏青々亦
當同焉

天保十有一年歳在庚子春
三月
権中納言藤原基茂

活花手引種後編序

昔者武図機出書其旆云其捷如風或詰之曰風雖捷疾如忽起忽止何日止則以守兵繼之或悟曰要第二合之勝也此講武之旨而有似此編焉寛政中桂月園主人嘗以我青山之挿花唱扵江都遂挙亜相園藤公之旨著活花手引種其術大行

爾後無繼者、猶慮之忽起忽止也、
黄門希賢公夙遵庭訓、深極插花之妙、而憾
無手引種之全備、且憫插花者流專趨浮艶、
不由不正法、 命有雅、著大全附以四方
親炙弟子所插花樣、文質備具者數十百種、
以爲活花準繩、而辱賜親閲及序文、方圖刊
布、此所謂以牙兵繼之者、而時機未會、

公遽捐館、事半而寢、殆於忽止、及
今相公嗣立、以
王事之暇、繼
先公之志、乃 命有雅、竣其功、於是有雅
喜而再加校訂、其中有鄙意所未盡者、恐後
進或不易曉、因竭數月鉛槧之力、以爲定本、
又請諸名家寄題、以潤色之、乃告成、嗚呼此

舉也、非有　公之命、安得興廢成功哉、果以牙兵繼之、得第二合之勝矣、有雅既不顧續貂之嘲、以著此編、然至論挿花、則鄙意自有所在焉、幸得此編遍及海内夫人、因此以宗我青山居猶兵家之宗武田氏、永傳無窮則非復忽起忽止之類也、是有雅之所竊期也、

時
嘉永五年龍集玄黙困敦冬十有一月南至日謹識於百花叢樓
承
命華勢兼會頭壽楽園水谷有雅

男　逸雅謹書

凡例

一 此書活華手びき大全と題することは過し寛政中江都桂月園泰雅翁の著されし手引種といへる書の世に行はれて其後編を次事永く絶たるを園公の命によりて此撰著なれる處なり故に巻中すべて泰雅翁の著されし手引種の遺漏を補ふ但し挿法を論ずるにいたりてはまゝ芳意を述らるゝあるは近世挿花者流の浮艶にうつりて法則のみだりなるをも正径に導んとて也是先生竊に道に志を盡けるが故也

一 巻中事理論評等の如きこれを悉く爾に挙んには文續渾淆せんことをいとふが故に暫く何々の書に記すとのみせりまた伎術乃

はさん等は活花早敎諭やといへる書に委しく辨ぜられたればそれを扶翼として其義全かるべし

一 瓶花の圖は高堂會筵の折にふれ時に當つて縮寫したるなれば挿たる年月の遅速ありといへども其順次を正さずまた席筵も槩略して唯一二を記せるのみ

一 挿花者の号は各瓶の傍に記さずまた肩書に御會頭抔記したるは其國の活花の司を命ぜられたるなり但し園号なるは職務也亭号なるはすべて御皆傳の徒にして或は御會頭に准ぜられたるも有りまた軒号なるは御中傳の御許をも蒙りし徒にて齋号なるはいまだこれらの御傳を受ざる御直門の徒也

一 巻中御家御直弟の外ハ會頭の門社たりとも是を擧ず。されバ花號の旁に通稱を記せるものハ後世其人を知るにたよりよきことを思へバなり

一 巻中挿者の貴賤演習の新舊を論ぜず。唯成圖の位置によりて列次をなせり。又和歌詩文發句の類ハ何れも圖によりて吟詠を乞得されども、これまた貴賤の次第を混じ實に止ことを得ざるがゆゑなり。

一 御當流の活花ハ巻中にもいへるごとく正風体と雅整体とあり。嚴格有て手引種ハ正風体の花圖のミなるを、此編ハ正風雅整の兩体を交へ圖されバ、雅學の徒風体を異なりとなやむなかれ。

それ兩編を照合して規則古今に徹せるを知るべし。

一 手引種ハ圖中狹く画圖麁魯にして活意を盡さゞるに似たれバ、今此編の画圖ハことに精細にして其勢形を筆端に顯はせり。所謂寫生家の妙に出づ。但着色をほどこせしものハ元より活花ハ目をたのしましむるの伎なれバ其形容に美麗ならんがためなり。また景圖を廣くし猶摺疊の大幅圖を加ふるハ花圖の整齊を細微にしめさんがためなり。

一 此書もと全部の稿本五巻なりしが花圖追集して巻々紙量を越し猶遠境なるハ集撮いまだ全からず。依て巻を後編續後編と分て十巻とし、既にその集る所のものこれを後編五巻

としく、今梓に刊まて故に草木養の遺傳據説問答の追考、
およひ手引種の訂正等ハ此編の巻尾に記すべきこと、其餘地を
得ざれバ續後編の巻尾に擧ぬ。

一、江都浪速の御會頭撰所の花圖ハ諸國の御直弟の花
圖等ハ續後編に擧、次で發兌に及ぶべし。看者載書の先後に
よりて會頭社門の甲乙を論議することなかれ。

一　巻中往々盆山の圖を擧たるハ當　御家の先君亞相基香卿の
深く是を愛賞したまひ三日月の巻といへる御傳書あり是を
著したまひぬれバ今まて此伎に志あるものハ必ずこれにならう
盆山を堂室添飾の一端として活華と雙観さし一にされざる所

謡座して深山曠野を分け、不歩して山海溪泉に望むの懐を
きおほに至らん。故に活華の位置に附して爰に收む。看者能
これを察せよ。

右十有一條受ニ
壽栄園先生旨ヲ謹テ識ス於錦章堂芸花窓前ニ時嘉永六年
八月望

春月亭　柴田濯柳
美松亭　佐竹勁節
蒼髯亭　岩田雙樹

活華手引種 目録

巻之一

巻之二

巻之三

一　君公會頭御直𦂶活花競𩀱圖繪
諸家和歌詩文載之
巻之四
一　同社活華競𩀱圖繪以諸家題詠潤色之
皇國活華赫隆考
巻之五
一　同　活華競𩀱圖繪諸家寄題并錄
一　草木正字異名等之事
通計　十有九條
一　活華手引種後編　目次畢

○活華手引種　五巻　追刻

右一之巻ハ東都御會頭霞谷園一雅准御會頭養霞亭琴松亭等の撰む所の瓶花圖ニして二之巻ハ浪花御會頭翠霞園蘆節准御會頭山鵰亭松養亭等の撰める同じく競𩀱圖繪なり。また三之巻ハ諸國御會頭并准御會頭等の撰所の圖繪ニしてすべて瓶花圖百餘瓶也。最御家御直門の徒のみを擧て諸國の名家高聞の士の和歌詩文を以て是を潤色す。又四五之巻ハ書院床飾の圖式床起原の考證ニ起て草木養撓之事并草木四候名寄品位高卑の事ぞて

木草分ちがたき品類の解據説問答の追考、および華花の字義之事、竹器根元之論辨等を委しく挙く、因に御當流相傳の書目、一月昇達傳の義をも附しぬ、爰におゐて前編の遺意本末全き所にして、實に活華大成の全書といふべし、續て發兌におよぶ也

朝貴諸公尊稱及諸名家姓名錄

○卷之一

園中納言基茂卿

東坊城前大納言聰長卿

花園左近衛少將公總朝臣

緌猷 題 田中泰堂　櫟堂 篆額 安部井音門

肹章 緑花月篇名 山田應龍　行納 木村敬次郎

○卷之二

實相院准后宮義賢大法主

希聲 梅辻春樵　蟻堂 吉江文雄

眞彥 川喜多眞一郎　梅可堂 椥川東擧

○卷之三

花山院前内大臣家厚公

園大納言基理卿

園右近衛少將基萬朝臣

光文　土佐左近將監　光清　土佐土佐守

章武　勢田大判事　擧秀　多村伊勢介

園[illegible]基祥朝臣

富嗣　中西陸奥守　佳月　清風吟舍

岸岱　岸筑前介　甫　浪速 藤澤東畡

土譽　三神元敬　規　中嶋棕隱

來章　中嶋鴝江　摘芲人　貫名海屋

千種正三位有功卿

隆正　野々口匠作

冷泉左衛門督爲理卿

萬休　妙心寺前嚴長老　爲恭　岡田式部大録

大綱　黄梅院前大德　松子　不坡其

伏原正二位宣明卿

基正　野々口宗一郎　實道　高樹院上人

貞彝　岡崎謹吉　眞弘　古道閣

忠彦　飯田左馬　章夫　山本藤十郎

神彝　須藤亟　世壽　鈴木百年

韶　大亦墨隱　秀雄　岡崎小三郎

資養　伴知一郎　春臣　能勢角右衛門

對君　大津 水原庯次郎　連山　岸文進

瑞應　西山清亮　緯　梁川星巖

薔薇　小森宗二　百峰　牧善助

保之　木間順次

○卷之四

菘圃淺野君

石夫　青根九江

知恩教院萬譽大僧正

祭魚　北川枯魚堂　長盈　長谷川玉峰

中山大納言忠能卿

正裕　春日亀次郎右衛門　完和　清水岸迺舍

千種侍從有文朝臣

伴雄　紀伊 長澤右衛門　長憙　大橋恭之助

敬忠 芝 某 梅室 櫻井方田齋

三條西參議左近衛中將季知卿

龍 宮原謙藏 柳絲 砂川某

明軒 宇野眞九郎 祐胤 五十嵐中輔

葭生 村瀬勘作 彩雲 村瀬雙石

李兆朗 梶村謙吉 梅通 堤 麥慰舍

希烈 生源寺星舲 直兄 松田伊豫守

長廣 大橋泰造 陶所 池内大學

景恒 香川陸奥介 柳所 小倉大八郎

亮 山本梅逸 種案 谷森二郎

芹舍 種山伴水園 温蔭 伴豊前

丈翠 大八木梅塢堂 勝成 矢田德右衛門

忠秋 渡里新太郎 秀山 松尾一峰堂

正方 弘 平五郎 温知 山根文之亟

立齋 頼常太 文麟 鹽川圖書

篤水 菊山千之助

○卷之五

菊圃 朝鮮李芳 明堂 碧玉菴前大德

柳坡 川那部圖書 仲濟 中林竹洞

千賀子 上田氏

押小路大外記師身朝臣

飄齋 平塚某 是香 六人部美濃守

榮秀 近藤某 良道 森田相模

應立 圓山主水

東園參議右近衛中將基貞卿

美茂 森某 應文 國井宇橋

式部女 高畠富子 水叟 實方院仁龍長老

有節 澤五仲菴 山處 西山眞太郎

保明 平川某 祥年 河村佳兵衛

良英 土岐善右衛門 海仙 小田百谷

月洲 嵒垣六藏 正功 大津 西澤壽平

鼎左 浪速 藤井花屋菴 玄々 田邊法眼

美親　岩本某
吉介　淡海八幡　西川善六

世孝　鈴木圖書
清亮　大雅堂玉嶺

美知　吉岡某
明忠　藤井上總大掾

㕛于　會谷土水
蓮月　大田垣氏

廣胖堂　郡山　平岡右衛門
連胤　鈴鹿筑前守

紅蘭　張氏

堀川正三位康親卿

清暉　横山奇文
延之　河本文助

亡羊　山本永吉
秀夫　山本秀五郎

文喜　草木名挿花者號　福井英泉
源朗　姓名録著目　中川廣篤堂

右尊稱貴號不敢序位次一依本書題畣之班耳

活華手引種　巻之一

壽栄園水谷有雅著
男　錦章亭逸雅校

活花正意之章

○皇大御國に活花の行るゝこと久しくして流派繁茂をなし其據る所亦昭々として各嚴格を建てり。其昔く瓶花の書をみるに仙傳書寛永廿年癸未開板抛入花傳書抛入花薄抛入岸の浪四季の友千筋の麓以上五部ハ貞享より明和の間の刊本也等ハ古く刻なる書にて是らハ足利慈照院殿の古則を旨とし其体東山相阿弥千家眞古流等に建る所其温奥ハ佛家の小乗大乗に基をなせり池の坊家傳の書まで是に似たし源氏流といへるも此慈照院殿の頃に起りて紫式部が五十四帖に大綱をとれる事源氏活花記生花枝折抄等の書に見えたり又松月堂古流ハ悉曇によりてつきたる容敎によれる事生花四季百瓶圖挿花故實集等其餘此流儀の數書に見ゆ又宏道流ハ明袁中郎が瓶史を準縄として事瓶史國字解にあきらけし又石州流ハ元茶道より出て花体を三代集の詠格に

倣へる事なしあぐさいひやち草等に見えたり又近世未生流といふは西洋の窮理學に則て規矩を起せる事挿花百錬花術三才噺等に見えたり又遠州流は風格數派に分れ方土によりて花矩區なる事挿花衣の香四季詠松の翠等其外數書のよく知らる所にて今東都に行なはる所の正風遠州新遠州等の數派とする所唯花形の功妙を旨として手錬に心を盡して其伎をよくするの一風儀にして至まりしてはよしとすべくの法度を越さばまさに下ちの域に下るとも云べし此他の數流或は醫學に基き或は唯一兩部の神道によりて建るなど繁雜にして悉く枚擧するにいとまあらず余が知る所今までに一百餘流に及び其書また限りもあらねばかく一二を擧て他の本據と顯すものは唯幼學の徒に此道の既略を知せんためなれば爰にいふのみいにしへ盛なりし今

支流衰たる有又近世起りて當にさかんなるの類も多かる中に古をよりの傳統正しく今尚隆んにしてこれぞ　皇大御國の古義に叶ひ神靈の現に護りまし給ひたると思ふばかりに奇く備はる我　青山の御家になん

有ける。然るに我　園の御家に此道のいと尊き御傳有しに尚中祖の君のいたくなげかしく思し後の花園の天皇の叡慮をかしこみたまふまにまに今の活花の正綱を起し風雅の道の万世かけてうごくまじき太しきを立給ひおほんいまや我國學の道いやひろくにひろけく御國の光を照したり大直日にかなひて正しきをしも得給へりこのまへ此御流のたふとき證跡とかられ出つかくて活花は小伎といへども御國の一勝事とこそ思ひはかられ是等は　御家をもとに真心が徒に解べきことならねば爰に委しくいはんにも活花の起原の事抔も諸書に數々引出たるが

何れも又自流を尊長せんとするのあまり牽強附會の説のみ多かりしは又別に活花諸説辨といへる書を著して委しく論辨置たればそれを閲して氷解爲べし

他の流派とも悉く正據整齊ありて今四境にきそひ繁茂をなすは實に花門の盛時なりといふべし。因に云らくいづれの學びもそれよりわかる道のみ膕居る時は生涯其奴となりて竟に峻秀の士となる事を得べからず廣く諸典によりて其癖を退け要を採り本學の扶翼となしく社博識と成るべきなれ活花の道も又これにひとし尤正流に基きて枝流参差をも考得べし唯流派の鉅砕を取捨するは其學ぶ者の器量に有のみ　爰に活花の伎は唯出生を糺し餘情ある体に入る事とのみ向に思ひ定むる流派いと多かり此出生をといへるは此道の最要と心得べき事なりそれに目前の出生と真の出生の差別有なり則目前の出生といへるは諸人專ら知る所の出生なりし所謂燕子花は三葉より七葉迄生じ水仙の本性は四葉なれども或は三葉五葉も有が如き抔いへり雅き論なり然りとても是を失ふこと有べからず又真の出生といへるは草木の天然

稟得たる真情を含て。是を花体に整齊せるをいへるにて。目前の出生にて真の出生とハ顕幽の反對なり。こハ口傳にゆづれバ其徴を得がたし今江湖目前の出生をのミ競論して。此真の出生を解悟せる人いとまれなり。真の出生を悟得ざれバおのづから草木天然の位置を花体に整ふる事なりがたし。そもそも活華の正意と云るハ。先第一に草木の真情を悟て位を正しく備へ。真行草の分体を以て。目前の性容を顕し。美麗を旨としておのづから雅情を含蔵せるの形態を整ふる事。最なし得がたきところなれども。此深義をときあかしてこそ活華の妙處に至れるとハいふべけれ。一瓶の花の容にも其挿たる人の性氣見ゆるものなれバ。聊もきたなき心をなさずして枝のまゝにも迫ハ巧妙を盡して挿べき事にあらず。天然を護るやうにて

おのづから山野に生成し。風雨の為に亂靡したる目前の形容のまゝをうつして思ひ挿入るハ。真率なるべけんとかへつて天稟の美質を失ふものなり。是真の出生を知るといふべからず。然ども又其山野に生育したるにも。天巧自然の風致を備へ草木本性をみだらずして真の出生の域に至るあるハ。其姿態殊さら絶妙なりされど其真の出生を見出んことハ。具眼の士にあらざれバかたし。故によくこれを研究し。其精巧を盡んことにて。我活華の正意にして 皇國清淳の風儀にもかなへるものなり。唐山の瓶花ハ。山野に生育したる形態を其儘瓶裏にうつし、日をかさねて保つ事のミを要とせり。瓶史、瓶花譜の類聊法則とミえたれども。今御国の活華の整齊なる所よりミれバいとつたなきものなり。よくよく彼國の風俗に仙人といへるものの抔あるさまにて瓶花の絶妙に至らば。永く保んことのミを旨とせる氣質にていちじるき所なり。又御國の風俗ハかゝる柔弱なる類にあらず。君父のため道のためにハ身命をも聊をしまずして。功績をあげし國がらなれバ活華の小伎といへども其の

氣げしなくバ有べからん。往古ハさしてうるハしからじ。今ハ規則備りてハ尊客招請の節
など最巧妙を盡してこそ饗應となるべきなれバ。人習儀なくしてハ貴人の傧なりしがたき
理なれバさとるべし。然ハあれども花を養ひ保もるハ事要の術なれバ。たとへいかほども手錬を
盡し挿入るゆゑハ性容を養をうやまうことくれぐれもわするべからざるものぞかし

古今花則沿革之事

○活花の世に行るゝや。上古花を翫しハ是を頭上に挿し。或ハ飾りなとして
客を設し事と。往々諸典に見ゆめれど。殊ゆうに法則ありてハあらざ
りしが中昔以來ハ花体に規矩を備へ。饗禮の一格やとなせるさまなりたる
に。尚今のごとき委しきに至らざりし。其後年重なるに隨ひ。風体
巧をなし。事實細微に備りて。漸文化の比よりハ殆勞しき迄に
術を盡せる事なるハなれるなるべし。然るに近世また風儀ハいにしへの正し
く清潔なる質を專り。故實性理ハ普く諸典を貫潤しくまんく

細究の極にいたまれり。是や此道のゆるしにはあべくの事業の成就
する様かくなん有ける。然れバ活花を修錬するに先此理をよく辨へ
得て。其功績をとげむべくなん
御當流活花の規則正風雅整九体の傳并掛飾の花矩等次第に委しく出す

書院茶室會席之花差別之事

○書院の花と。茶室の花やゝ會席の花とて。何れも差別ある事なり。
まづ書院ハ座鋪ハ客舍にして。もべて禮義を正しくして應接する
るの所なり。茶室ハ隱逸靜座の設にして翫樂を旨とするの席なり。
故に書院の花ハ必貴人招請の爲に設け。或ハ尊者の翫供に備ふる處
なれバ。最風格正しき体に限るべきなり。常に手錬するも大床の花の心
得にて。習熟せざれハ當に其席に進たるとき。心憶して伎整ひがたし。

二間三間の大床上段之間等の床は花をよく修錬なし〳〵。是を習熟されバ小座敷向の花抔ハいと心安く成就さるものなり。但し大床にてえ軸ものゝ大幅にて三幅四幅五幅八幅對にも至るもの有。是等の取合も常に心得置べき事なり。入るべく花ハ軽くさらにこと安くして、手厚く入るゝかたきものなり。軽く入れし形態の調ふらハ巧拙にかゝハらず出来るものゝ如く、是正調にあらバ手厚く入まこてよく風姿の調ひたるをこそ誠の妙手といふべきなれ。さし他の席ゆく所望抔せらるゝ節ハ常に習熟したる手錬を以て、随分手早くなし安き花を挿終るべし。是時宜にしたがふの心得なるべし　又茶室の花ハ飛華落葉を観ずる意にて侘を宗とせされバ、元より茶を先にたてゝ花を次とし、故に投入といふ名義とはなるなり。そもそも茶室の花に法則なきを嘲る人あり。さるハ書院と茶室の差別あるを知らずして論ずるなれバ、是等をこそかへつて嘲りいふべきことなれ。併し茶室ハ茶室の作法ありて、花も手厚きハ好まず。纔に二三本を挿て唯作意の洒落を旨とはするなり。かく書院と茶室とハ意味のことなることをしらずして、活花とさへいへバ書院も茶室も會席も同様に心得るといと麁魯なる事なり。書院の花に投入といふ事ハ絶てなき事にして、茶室にのみ投入といふ事微考あり。こハ二の巻にいふべし。又會席の花ハ席上にそなへての取合を見るものなれバ、質朴なる体、優美なる体、屈曲なる体等、大小種々の形態をなして、或ハ書院めくハ入まじける屈曲変化の体をさし、又ハ茶室抔の趣あるをも取合もてなり。是集會席の本意とする所なり。然るを會席の惣体を見ずして一二をとうかゞひ書院の花と同じく論ずるハまゝ會莚の位置をと知らざるもの也。右の外神前祭花佛前供養の花抔ハまこと心得別なるものなるべし　こハ早教諭に大旨を著し置たれバ爰に略し

花体花器相應之事

○花と花器の相應ハ活花最要の儀にして、古代の花器と近世の花器と

各其形狀に應じて差別あるなり今活花の會遊を見るに十が六ツ七ツ迄ハ花と花器の符合せざるものなり又甚しきに至りてハ此花器ハ當流に用ひざる抔いへる人あるよしいかに拙き事ならずや、たとへよき洛好の器なりとも不浄のもの或ハ出所正しからざるもの抔ハ用ひざる事論なけれぞよ、花を挿ためにに製したる器を用ひざるいふ事ハ有べきか、凡て活花ハ花に應じて器を撰事定例なり。

されどもまた器に應じて花を挿こともあるなり。當に其時に臨んで次条にいへる正風雅整の規則に熟せざれバ、花体自在を得がたきものなり。

貴人招請の節抔ハ別して花をもちろん器をもよく麁畧なき様心を配るべし。最拜領の花器銘器の類ハ取扱ひに心得あるなり。又會席獨樂等の節ハ花と器と種々取合して用ゆるを風雅の所詮とはすべし。古雅なる花器竹器の類に屈曲なる体を入たるハ不取合なり。又近世東都より鑄出せる末廣にて唱ゆる盃形の花器等に直立にて水際の高き花を

入たるもいかく見苦しきものなり。但し小形の花ハ格別目立ざれども大形の花に至りてハ花と器の離散せしごとくにみゆる多かる

御當流にてハ古風の花器に正風体、近世の花器に雅整体と規格を分て挿なるゆゑに最器花相應するなり。また金銀宣德螺鈿白銅錫の類美麗の花器ハ書院と會席にもちゆることなれど茶室にてハ是等を好まざれバ、竹器陶器の類古雅なるものとよしとせる也。但し涂附ケ金らん泥等ハ至つてうるはしきものなれども取合して用ゆるもよし　凡雲上君公の翫備にハ美麗なる花器にあらざれバ擧たまはざれバ、故に花と麁畧に挿ことはならぬなし。かゝれども活花ハ書院の風格基たる事器品の上に據ずして論なきものなり。茶室の花ハ投入ともいふ称のごとく正格をなさざれバ酒落に挿入ることを旨にてあれバ、花器もまたこれに準ずるものぞかし。まづるを

書院の花器ふ茶室体の花を挿ときハ、瓶花の取合ぬるのミならず。

第一禮を失ふるふおよぶべし 此条花を翫ぶ人の深く思量すべき事也。因ふ云茶道ふ用ふる器の侘を好むハ貴人ハ

常ふ美麗の器ふなれなましかゆゑ轉して侘たる調度を用ふる趣意なり。然るを

平俗の常ふハ美器なと見も及ぎざる族の好て侘を弄ぶハ本意ふそむくなりまた

けれど茶室ふて美麗の器を用ひてもいふ不取合ふて幽情を

なきさバ是等ハ時宜ふよることもゆへ、本據を以て強推がたき所なり 又花臺ハ花器ふ

應して差別あり。艶美の器ふハ上品なる臺。侘たる器ふハ質朴なる

臺または薄板等をもて取合すべし。すべて花臺のさわがしきハ宜

かくず。隨分靜なるをもてむべきなり。また高低ふて大槩脊み高き

花器ふ低き臺。低き花器ふ高き臺ふて取合すべし。但し砂鉢の類ふて

高き臺不取合なり。また砂鉢ふても小形なるハ高き臺よし。是等

甚繁雜ふしてく委敷ハ口傳ふよろけれど分別なしがたき處なり。

花器眞行草の事。并取合せの事

等ハまし早教諭ふ出しなきる

花伎習熟次第之事

○凡花道を學ぶふハ前編ふ見えたるごとく禮義を正しくすべき事

專一なり。其習熟の次第といふハ一ふ留方。初心のうちハ花体の佳拙ふかゝはらず瓶中ふ居る事の工夫を専らとすべし

二ふ撓方。是ハ花の殺活ふかゝはらず、かたき木々の和らかき草々のたはみも自在ふ撓

らるゝ様手錬する事なり。是を篤く熟し得ざれハ花体の働自在をなし

がたし。三ふ花体 是真行草の差別正風雅整の九体を會得する事なり。四ふ養 いかほど手錬して挿たりとも性氣衰へ潤色うせてハ

活華の本意ふそむけり。養ハ平常手錬ふ洩る事なく、別して炎暑の節抔ハ心を用ひて養ざれハ保ち難きもの也 五ふ性容 是ハ梅の屈曲竹の正直なる等まさしく

四候ふ生ひ出る草木の出生を會得し又性容をくさしく辨へ知ることなり 六ふ變格 委しくときまへたるうへ或ハ老木曲枝の類

又草々のゆくり出生くねまがりたるもの蔓草の類等ハ花体の正格を變化して風情を

調ふ事なり。是ハよく習熟のうへならでハなし得がたき事なり。初心の内ふ我意を

以て變格をなさば時ハ闇夜ふ物をさぐる如き 七ふ位 この位といふハ甚會得のむづかしきものなり。譬ハ燕子花と

伎ふしてく是を異体といふなり必つゝしむべし

花菖蒲と花あやめと一八とハそのかく同し姿のものなく燕子花ハゆたかに位の自ら
に見え花菖蒲ハ猛き位の備り花あやめと一八ハいやしき姿の自然にこゆる性容を差
別しるいれるをいふなり　かくのごとく順次を正しく修行されバ活華の妙手に
至る事遅々なし其序に違ひなく行ふ時ハ生涯花の奴となりて
昇達の期に至る事有べからず然ときハ花を挿ことハ惣体に精心の盈る
をと最第一とし心得べしたとへいかほど巧妙をたくみとして挿挟む
とも精心盈ざる花ハいかに拙く見劣りせざるも一枝一茎を挿とも
精心こもりたる花ハ實に整齊として見ゆるものなりさと修
行するにハ初學のときより一花一葉に心を用ひなバいよいよ瓶中の
納り等に深く精心をこめて怠りなく習へバおのづから熟所に至るなり
まんべくの道精心みち盈ざれバ全き備へたちがたきものなり唯精心乃
至るとし至らざるものハ其勝れたる方より明らかに見ゆるものなれバ
拙きを耻て當に精心のみち籠る所を專ら要と修すべきことなり
將花体を習ふ間にハ必故實性理をよく辨へ識るべしそハ何となれバ
事として理との備らざるものハ全く成就の極にいたらざるものぞかし
右五ヶ條ハ活花の槩論なり尚詳解ハ早教諭といへる書の初編
より九編に至れるものに數条委しく著し置ぬれバそれを閲て
辨へぬべくなん

○雅整体九枝配當之圖

花器の八方に配る事ハ御當流の深秘にして委しくハ九体九枝傳に詳なり

前編に七枝配當の圖ありて右著せし所の九枝ハ雅整体の規則にして真行草の九体ありて悉く變化口傳あるなり

○夫御當流の活花九体といふハ前編にみえたる骨法九体の實測をいふ也。但此前編の圖ハ其大旨を記したるものにて尚本來の規則ハ別傳あり。是を正風体と稱へ所謂真に三体・行に三体・草に三体の差別を備へ則古傳の摸範とはなる。此正風体に七枝配當の規則有て七枝配當の圖も前編に出たり 是九体に應じておのおの變化の格をなせり因て是を準縄として古來諸國執務の輩又此極に肺肝を砕事少からず。茲に故黄門希賢君往年花則の細窮に御心を盡し玉ひ此正風体の九体を研究有て新に雅整体の九体といへるを起し玉ひつ。こは又有雅に訂と命じ玉へりかしこき哉此規則備りてより猶正風体の摸範ともかゞやいて其古体の整齊なる所光暉をなせり此正風雅整の規則をもって萬態にまたる時ハ草木悉く其性容をつくねきに天地自然の真理おのづから瓶裏に備る妙要有なり凡瓶花の形態諸流繁茂なりといへども此正風雅整の真体より外に出るハあるまじきなるべしされバ此九体と限るに深き義理有事にしく草木天然の姿なるべく此極を出る事のならざれバ即正風雅整の規則の外に花体ハ整ハざる理なるをと曲て姿体を作るときハ自然の姿にそむくが故にこれまべての花体此規則に止まることを思ひ定めて是より後ハ當御流に正風体の九体と雅整

体の九体の両格備りて譬ば八咫の鏡に五百箇の玉を以て糚へる如く或ハ金聲よ
て始めし條理を玉振して終るが如く備てそれぞれ此雅整体の九体にハ九枝の
配當と六枝の補格ありて天地萬物の窮理爰に止る妙要あり。此條口傳にあらざれバまさ辨明に及びがたし
正風体の七枝雅整体の九枝ハともに器瓶に應じ變化する所華葉枝の多少に随ひ
三枝五枝七枝に配て或ハ増補して數枝數莖にも至る。最合して全体をなせる等其
活動極りなきものなり。さて正風体と雅整体ハ古今の對格なると則正風体ハ前編
に數瓶の圖あるを以て爰にハ擧て顯さず。最此編次々の巻中にハ両体ともに數
瓶の圖有といへども或ハ一瓶に二種三種をさせる体の多ければ初學の辨明がたからん事を
思ひ尚雅整体の尤正しき骨体ともいふべき一種一瓶なるを九体左に撰て圖を著し
これハ九枝配當の摸範と花器花臺の真行草に倶て其規格の全備せるものを

あらざる。尚草木の性九体の規格に熟叶へるものを擧ぬ。但し此九体といへるハ
草木の性曲直疎密にかゝはらず。何もとも其一種にて九体を整ふ事尤自在也。
また如何なる難枝難花なりとも。此九体を以て量るときハ妙格をなさしむ
齊ひ。安し。是等の委しき極ハ口傳にあらざれバあかしがたきものぞかし
今瓶花者流におゐて、秘事又ハ口傳と唱ふる事差別あり。秘事といふ事ハ道を重んじて、其傳ふ
べき器量の備らざる者にハ傳へを秘する事なり。さるを秘事と称て是を活るものあり。又人に物
問もて我しらぬ事をつくろはんとて、これを秘事と言逍る人あり。是等ハ風雅の道に志ハ輩の
假にもあるまじき事なり。又口傳といへる事ハ文字にも書にも書寫されず。詞を以て言にあらざれバ通
じがたき事を口傳といふなり。近世ハ文字にも書にも書寫さるゝ事どもをたゞさまで記さずして口傳
やと書止メ置たる花書を多く見及びたりて慷慨しき事になん。爰に書添たる口傳といへる事ども、
實に花枝をとりてなさざれハ徹のなしがたき際なれバ、猶此御流をまなべる徒ハ諸國執事の會
下によりて、其口傳を明らむべし。但し正風雅整の大旨ハ後巻の置格をとくとして深意を
悟るべく
なるべし

樂善

瞻雅而極変化
尖雋而帰齊整

嘉永癸丑孟春應需

東坊城大納言聰長卿

聰長

芍薬（しやくやく）五本

壽粂園水谷有雅

燕子花（かきつばた）　七本

美松亭佐竹勁節

山茶（つばき）　五花

蒼鬚亭岩田雙樹

右圖ある所の三体ハ即雅整体の真行草なり〇附上ケ〇中張〇水際

靡といへる三体也それ此真の体といへるハ地中より草木の發生しくやく姿を定めたる体を備へたるもの也故になびき下れる風情となるべし譬ば貴人の束帯めして立る容の意也又行の体といへるハ草木生立て漸形状とゝのひ盛なれる風格なるハおよそ人の歩行意なり又草の体といへるハ木草盛りを過て枝條屈曲をなし或ハ靡下り折しくいと興あるさまなるゆゑ譬ば人の奔走ある意なりされバ真を行を發し行ハ草を生ず　但し　真行草ともに過不及なく正しく全体を整ふる事是又御當流の規格也　筆道において真行草と活華の伎にいふ真行草ハいと差別ある事なりけるを同じさまに記したる挿花の書あり草木ハ天然活生の種書ハ人作筆頭の伎なれバ意体大に異なり必誤る事有べからずこハ餘りに巨大なるたとへなれども廣く　皇國の體なくいはゞ真ハ神代の如く行ハ神武天皇より

奈良の末迄の如く草ハ延暦大同の以往慶長元和の以前の如し然るに其真中に又三体ありてハ神代に天地之初發と顯幽二分の有が如く行中に又三体有ハ儒書の來りける以前と佛の渡りし前後の如し草中に又三体有ハ平安遷都の盛大なる承久君臣の序を擾し建久亂後應仁の御衰頽有る如し今よ　皇國のけふまで萬の事も漸に古に立かへりつゝいよゝめでたく仰がゆく御代と成ぬるハ此三体のさまの草中草の体に至れバ此のつゞき真の真たる元に体に立帰りて盡ぬ榮えをほこりし所の奇しき奥旨ある傳に熟叶へるものぞかし此三体を學ぶにハまづ真の体をよくなしてぞ本つ柱とつきかため次に行草の体を學ぶべし行草の体を前に學で後に真の体を學バ本末を違ふゆゑに進事遲し惣の花形心と一体の主となる此意也

山茱萸（さんしゆう）

霜松園中村一成

萬年青（おもと）　九葉　實

蓬松亭森村羽翠雅

菊

晴月園沼尾一叟

右の三体同じく雅整体の真行草ありて○乗越○表曲○前發見といへる三体也この乗越といへるハ九体に通徹し活用をなして變化最自在をなしたるの体なり又心の枝の活用順逆の差別ありて今古の格を分つ等なくて此体に限りて口傳にあらざれバいひしがたき事いといと多し又表曲といふ体ハ表裏の義に深々の窮理ありて草木の性容を委しく辨へざれバ其理を明らかに知る事かたくこハ九枝傳に委敷著しつ表裏の事ハ書院飾の式より萬の事にまでありて論ひある事なるを他門にこれを誤るものいと多く瓶花の書に見えたり是等よりよくよく習熟して深義をさとりきまへ置べき事なるぞかし　表裏の事を辨ふときハ花体の本勝手非勝手といふ義も自然の理を知るものなり

水仙（すいせん）

五本三花

春月亭柴田濯柳

えにしだ

嘯月亭大塚雪溪

梅

錦章亭水谷逸雅

右の三体と同じく雅整体の真行草ありて○後附ケ○裏曲○後發見といへる三体也此後附ケといふハ深き秘旨ある体なれバ容易く書著しがたし又裏曲といふハ則表曲の反對の格にて後發見といふハ前發見の反對の格なりすべて此九体の名義ありて体格にことごとく深深の窮理ありといへどもこれハ九枚傳といへるに委しく著しなきを以て爰にハ省きぬ

○九体の規格一体ごとにおのおのまた真行草の差別ありこれハまづ梅と桃とを分つに梅の性にハ真の体なく桃の性にハ草の体なしさるを梅樹をもつて真々の体をなせる時ハ則真々の草といへる体をさし又桃樹を以て草々の体を挿ときハ草々の真といへる風格をなせる也

故に九体各真行草の格有てもつべくハ廿七体なり。是をつゞむれバ九体に帰し。又九体をつゞむれハ真の一体に帰するものなり。是等ことごとく口傳によらざれバあきらめがたし

○九体の形状枝もの（梅桃さくら木の類を云）葉もの（おもと水仙の類）花もの（きく芍薬の類）に應じ。また山里水によつて變化口傳多し。また九体に真行草の座といふ事あり。是ハ三体ともに心の乗に定りたる規則有て。これに随ふて九枝の位置に差別ありて。また真と行や草と全体の活様に八境の定格ある事等をいへるにて。尤自然の妙理を備へたるものなり。何れも花枝を以て解語せざれハ辨明しがたき所なり

○草木二種三種まじへ挿事。御當流にてハ九種を限りとするなり。

是も九体によるがゆゑなり。此二種三種等取合をなすときハ分格の傳といへる事ありて。他門にさだせる。根じめあしらひ抔いへる体とハ大いに異なるものなり。（これまた口傳にあり　されど明しがたし）

○花枝の厚薄真の体を挿時ハ薄くこれ発生の姿なれバなりまた行の体を挿ときハ厚く。草の体に至りてハ最繁く挿事習なり。是等

道の真行草とハ大いに異なる所なり。書にいへる真行草ハ、真ハ字格正しきをいひ。行ハ是を省き、草ハまた省く。草木ハ発生の体を真とするゆゑ。行草に至りて枝葉を増の理也 是また他門あやまるもの多し。もとも真行草ハ各一格の称なるを。花体の三才を真行草といへる流派あり。是誤りの甚しきものなるをや。書にも一字に真行草を兼たるといふハなく。書院飾にも真行草を兼たる飾抔いへるハあらぬ理を考ても知るべき事なり。是等ハ深く思慮をすべきものぞかし

故に菊なでしこ。燕子花。水仙の類。會筵等にて数多く挿時ハ。必行草の体に限るべく心得べし。但七種九種抔取合をなさバ。また別に心得あるなり

右九体の惣稱を雅整体といへる事ハ雅ハ正しきをいひ整ハとゝのひたるをいへるなり。正風体の摸範を研究し。循雅しく整ひ齊たるの意なり。贍雅而極變化失雋而帰齊整此義よくよく考ふべし

活華手引

巻之一終

跋

近世插花者流趨浮華事妖媚殆如剪綵刻銷鹽則艶矣獨若無風致何此壽案園主人之所以著手引種續篇也晋簡文入華林園曰會心處不必在遠翳然林木便自有濠濮間想也余令讀此册子一叒一木從尊於鉼蟠於盤天真爛漫饒有風致使人悠然有登邱臨壑對紅望綠

花園左近衛少将公總朝臣

之想而會心處近在几案間便覺
簡文意想尚屬邈遠矣豈所謂
進乎技者蓋此乎非耶癸丑仲春

左權少將公總撰